俳諧一串抄　坤

へ5
1314
2

門 へ 利15
號 1314
巻 2
京都大學圖書

俳諧一串抄巻之下

○題詠の部

さればいつるが如く。詩歌の詠も物事を述るこの実用なく。物事ハ季節の詠物なく諭ずべきなり。由志にまづ詠題の形くに合やゝる序を乱し変べきなり。既に詠物の格狩を賞詠する為の句とせハ。狂藝一偏に落なん。就しく次に人くその境界に應ずる種芸成ハ宿所木の題乎就く。其具合成式く実用の備へとなんべきなり。

故に今発端をさしたるにハあくりのく
一とせハ一夜つまりてなつかしく
古畑や薺摘ゆく男ども
おんりやくにて薺ハ賣ものなれバ
薺(なつな)ハうりのいみの義なるをとくさにハいつるがおし。
これ一年一夜の祝日なるを示したるなり。古畑
の句も古曲のれあるを喩したる。弟二の句ハ
白ひなき微菜なのこ新春の為に賞するを。
宮中の食物にて喩したるべし。

嫁るさとの梅や難波の二年越
これ翁二とせがけまて古郷へ帰遅る時の句
なるべし。難波ハ二年越といふ料なり。これ
和爾(わに)が難波の大宮に来まして歌に冬ごもり
今を春べと二とせにかけたる辞なりといへるなり。
古郷ハなにはを尊びまして大坂を指すハ誤ならん。
梅ハ来まの句とはの出る山路の
の句と。清さと共に俗語まてもなのでのあり緩急
ありの句とハほんのりとまて。梅花の日光にさそ

これがりと薫りを發するを編しせいつる句なり。日新のこの門と出るとせだ梅桑に約やあらるべし。詩に依りて思へ淑氣催黄鳥まく。日光ハ淑氣梅ハ黄鳥なり。山路ハ豪盛のある所よ備ふるのこ。

かぞへ来ね屋敷〳〵の梅柳

これ彩大路の句なるべし。長閑に見て渡る楼閣などを。梅柳のかく飛出しふるなり。此句梅柳の句なりとせバこの若く所なし。

春もやゝけしきとゝのふ月と梅

芭蕉の句也。月梅は往の雜なれバ一ッ巡の題ともなるべし。此一句の上へ月のうちてゐるふとゝのふるは數段すぐれり。往の三ッ物を出でむすぶる一ッを論ずるなり。

梅柳さぞ若衆かな女かな

これハ梅柳の句也。女ハむまれつきよるべし

麦めしにやつるゝ恋か猫の妻

これ傾るゝ句なり。猫の上に屈つるゝか恋にて作るべきを略しぬるなるべし

鶴下りて七日も見る椿かな　邦

花咲て七日鶴見るふもとかな

これ二句ともに集に出たり。初句ハ花見ん七日の句なるを。これぞ翁の志し庵なるべき。次の句を翁の正なりとする説ハ。初句を鶴が花見んとするが為く。鶴一たひ下れども花を七日経と定むれど。鶴ハ七日といはん料の序也。此体裁ぞ許す乃邦天の稿立の句にかなへ。次の句を正とせば花の類ハいふにとらせまし

花の雲鐘ハ上野か浅草か

これも墨れ句なるべし。花の雲ハ正平花頃指辞にも鐘撞てを許なるまで東端の類を為がしれ。おそらくハ筆者雲の上なる日の字をのく誤れるなりん。花雲ハ直に翁草庵ヲ居なのし。室内の雲をあさかめて何の事かいづく。ふつくやらん入れのこよふ花やちるらん。などいひかへるべし。慈悲あの鐘を歎枕聞とつくりなん楽天が語もかなひ出べる

花の陰謡に似たる旅寝哉

これ俳句の姿を見せりといひハ左なるか。

鐘消て花の香ハ撞く夕かな

これ鐘ハ撞へきものゝ。香ハ其のまゝ消るを容あるを打返したる作意なり。鼻を衝くに香の賞語なく。句のこゝろハ日ハ既に入ぬれど。花の香ハ残芳してある也。

木のもとに汁も膾も桜かな

この汁なりしを桜鯛桜海苔などなるをいふな

花は媚しておれといはぬがよいといふなり。

艶なる奴花見るハ雁が歌ねさ句

これ花の賞翫に紛れたる句なりん。雁とゆへハ歌よみなどに対すれど素よせハ奴の句となるべき嬉あり。さることを賞する也。かく歌も奴もいふべらぬ備ふる相をとするも衍衛なれども。さゆへゆる雅を風調の義とし。古今集の序なる黒主が歌の評判を俤に作りたる也。其句にうらみけるなり。

さひしさや花のあたりのあすならふ
世や人や花よりもその翁之十里
さひしさや花のあたりの翁人参
この二句ながら高人を以てあるハ病ふしたる
らうさをいとふるまゝく。花のめでたきを喩し
たるく初句ハ如さくしいひ董して後年賢
君のそしりを請くしとあしかきなり。次の句ハ
魏の曹操といふ人曹蔵か碑をよむ事揚脩ハ
おくれたる事三を道之十里なりし。故事なり。さ

れど世やハ太平の時代をさし。人やハ人の情然さ
しく此句の翁君ハ其の句を賢君まく。共年
さひしきこさをはげく。花の賞すべきを喩し
たり
花の香もおもし桃の白茶か秋
猿沢や花橋も茶の香ひ
山吹や宇治の焙爐の匂ふ比
初二句ハ茶れ句末三ハ山吹の句なり
橙や伊勢の白子の店さらし

この句神宮のまへにて神楽をうちならせるなり。
神楽奥行ハ叢書より正二月を整りとし。
祢宜の末とあれど江戸様中の陸葉もあて
とあるゆえ詠り出て花店さし出りて喩し
たる也

行燕まで来る芽張柳まで

素燕の句なり。表ハ花ゆく燕の柳の木
までに来てハゆきしまるときうせあるのら。
裏のこゝろハ秋行し燕の又きてるよとなり。

芽張の字にて萌しそむるを喩しつゝこれ力
句にして賞するものなれど只変体裁と名付く
発句也。總て句ハおのゝ源より出せる早苗
読れ句のおもむきすこしも他に心せず意味ある
ところぞいふなり

手だてなせど夕風やどる早苗かな

生きあがらむとおもふる生涯嵐かな

木隠れて茶摘も聞やほとゝぎす

菊畑や狼あらふ道なかりけら

初句の早苗ハ植渡しける風にたとへ靡
とのべて。生長のやうに富州なるを喩せり。
夕の字にかゝり。生海嵐ハ立場合にかゝる
おりて。飛のあとなどを喩へ。一の字にかゝり。郭
公ハ人なき山林にむかひあはせて。初声の貴かる
を喩したり。蘇州の句ハ。剛柔を合せの格也。
かく等なる例に古人あまたして。大江丸中なとの
京の蘇州ハ右にしもなまね抱てそ有なるとた
とへむれよせられて。かの桃青が早葉にハ志かをと

笑たせぶりなをは
　夏の月御油より出て赤坂や
られ東海道に稀なる十六丁なるをさぎりて
短夜を喩し。赤をかけに働かせ且流しのや
小歎を合めたり
　一声の江に横たふや郭公
　郭公声横たふや水のうへ
あやしきん消りたや高ひとゝ
此たしめ二句も集中並ひ出て。翁ハ路の句

ぞよりにて定られし也傳ゆりとぞいと侍しりとし。
初句ハ名所に掛合せたる語なれど。必湖な
どに比する名枕なりん。句意ハ流石の名景も
此一奇に奪ひとられしごとく。奪ふの意を換たふ
の一云に含めり。古態のまゝ孤なし。頭の句をも
景色のありさま。名に負ふ貌なりけれど。郭公は
奇を喩たる物なし。さるまゝもなりと例るが
ぞうしと也ぞ。水鶏とし鴫ともいふもかたるゆり
あぐして格も没たるべし。且江となりと云松の

詮ふし大小有り。一の字ハ大の掛合せなり。果
の句も其對を擺べし。鶴とハいづれも大相なし。
繪跡ハ竹生島ハ此大嶋なりく郭公を喩し
たるなるべし。

橋や此川の難中の郭公

古れ橋の句なり。時鳥ハ舩とならべりて此句意
郭公を経奇きの義。此の難中ハ古々集
ま「いまへの難中ハ清なり」とよみし難中に
此二ツの経奇をいまへゆりくむりし並無不橋

のみ情を喩しくるなりけり。郭公の句なり
と云ふ題中に用ふ。句意も能く解すべし
むかしを宿はさびしけりやせんつれど
此句集中毒花の形はなんなど。牡丹の句なる
故し。これ翁が常れ才機なり。
萩の秋や露々ぬし冷し物
蓮の葉や夕立てせしる合羽
初句中のての字満寄なり。後の句秋季とし
盃を精霊むくへの句なるべし。

ちる暑く吹や一樹の松の音
これ暑さ涼しき松風を暑気に謂しる
物なり。一木ぐらの涼風は暑気に奪ふ之。
却て冷風となるなりけり。天地間ふとあるなる
大暑を喩しくせ。
名月や六日も常の秋ならば
桐ふの樹の葉哉もいとく星の新
七夕や秋と定むるはじめの秋
九句を並へ吟じるは必ず序破急ありとぞ。

此句初ハ近増る思を述へ中にもあさからぬ
契りを語る後も秋の悦しきをかけて星の
影を惜しけり

目にかゝる時やさびしの海の月

春秋の移り易きを歎じたる句なり。惟り
駒目路の月をのみ思き程に思はせ。山路帰り
し暮るゝ時の間もなく又宿へ来ることなり。
さて句を作るに体と用との分ちあり。体とは物を
せよ用はせぬ。其物の名などをいひかけるを
なり。用とハ其物の働などをいひかくる事なり。
古人も中秋の月に於て示さだ。九月の初さ
つや。時ハ今宵水夜ハ宴宿まて空にも暑乃
標なく。天漢にも渡かゝる雲もなく皎々として
曇るさなり。深くかゝりし流むかあし人。遍く隈
なく。照らしたりしぞ。その姿形もあらゆる
物色ども。その名称を古人の句に「名月を掃く
なげける茶碗かな」。これ体の句なり。破れぞ
茶碗もやるせなかりし。天と月とおもはし

うるさきを喩しけり。此ハ周の句ハ

名月や花かとみえて棉畠

名月や鶴のたゞずむ庭干潟

是ハ月を空に置て其光りを喩しける周乃句なり。然りとも俳諧の本意ハられなくしもいたゞ。作も周も向ふに居置き或ハ詩歌に離け並べし。是傍を句に拠るべきなり。其角が「木母寺に歌の会ありけふの月」と吟ぜしも。只歌会の噂のみをいふなく。聴く人をしていはざる会合もあるべき此良夜と思はせけり。

雲折々人をやすむる月見哉

名月や児立ち並ぶ堂の縁

庵のとく人に見られし月見哉

名月や我世も更けていつの暮

名月や我と筆架の図　西

名月や池をめぐりて夜もすがら

味肴のあらぬ花なり秋の空

良夜の句いくらも有とも大体ハつくせり。初句ハ

休むとかげて。休まぬ程の月にかゝれざる故
喩し。此句も表ハ見ずしらずに月を眺ぬ也。
見ハ必至に付く体なれど。裏の句ハ裏より前
よ貴宅に集ひかゝると云ませたり。其次曰句ハ
月に用て観しくなり。後の句ハ能く人に能
しく全く月を探しせたり。されハおのく作用
の心面をとまづし傍を述べく月を喩も能る
とべされど傍をとらんて句宅を探るに於てく宅。
必その命かゝん。古歌ホの傍を句とませて。全宅を

探して抜むるハかとよりの事なかる。緯の一二
此されたとなく。宅句に全く宅に叶まじ。或ハ宅緯
の驚きの面白るるを言え。是ハ何集の歌の驚。是
ハ彼緯あるゝ探りまつし。汝まハ作者の宅を失
ふも必かゝん。

稲妻や顔のところ芒の穂

芒の穂ハ驚ずまく秋光を發せる句なり。今借て
稲妻を喩しくも。闇ハ光り忙ろ場ぬまう
け。芒の穂ハ驚きの落莫緯まゝく句宅ハ収れり。郷る故

或人私云ていはく此句に秘傳あり。此句伊勢物
語かきつばたの段の体なり。稲妻の光且なるを
秋の雷なり。又住吉大中納言を擬し。妻
ハ所に二條の后なりといふ。これハいかなる方よりの
傳ぞ。おそらくハ好事家の夢。
行秋や手をひろげたる栗のいが
行秋や男ハなくのぬれのなみだかなそ
初句ハ秋のなごりもこれまでなり。今ハ手
頃もあらりと歎じたる也。次ハ詩経なる秋

男悲春女愁ともいへるにおもひよせたるなり。句
意ハ此夕暮れ侘しき涙よりかの事なりしと
いふべきを。たちまち反覆しくさんが男なれ
ど泣かずと作り詩の悲しみを今一等踏登れ
り。翁が古詩古歌を取ハまづ此類なるにて句
をもりのやうなりすれど。古人の糟粕をなむるの
説をまぬがれざること必なきにハあらねど。既に其
人の一家をなるに於てハ。それをさる卑劣乃志
ありんなるしかる詩歌の人にかぎらず。辞ハ古き説

慕ひむは新しきを用ひんと形にはゆかぬや。

　落お折目れずの茶巾かな

茶巾は落茶の縁語なり。これらの縁語をぬけ出ずして
嫗らは人あるもさるものなれどこれなくては咲くぬ句となる
ものを多く数添ても人々の句を作るまと挟なり

　風や頼まれつつむ人の声

　胃業やそれと見るより蝶の亮

初句時節れ病ひと解るは例の徒言(たゞこと)なり。此は
頼まれやくのたのみなる者かく風の樹木草

鳴きさけぶ続しきを喩しとなり。畢なく
小。御の句人の魚と出せるは非なるべし。浮世の
句に「秋風の吹渡りけり人の魚」と詠るは秋紙
悲しむ人その顔色にあらはるをいふ。秋風
の声身にしむる。其験しものに悲しきを喩し
たるなりこがらし秋風おなじ。虚家のものあつ
ら。物態形容するのけぢめおのづから新有
べきなり。背業れ句中七文字に迅速を勧
めし戯なり。

ふり賣の鴈あはれなり　夷講

夷講祝賣ハ繁栄せんとなり

初句のこゝろ渡鳥のめづらしかりしも。今ハ多くなりて東西いづくにも鳴ありくをふり賣となづけて。今日ハ海物の鮮を賣買せるを論じるせり。死鳥をしく商人の振賣とせバ。あはれとみる俳言働らば。さりとても振賣とふとはいはゞ。いやしめる泥実病なく風流も亦ゆうあらん。次の句ある能うりれ精も。海物を賣せる縁家ゆへにせり

掛とりに哀の私をかくせ大や

かけ乞の冬季なるや。凡四季にかゝりの年の終りを急ともいひこれ季の大かたなるたとふるなるべし。さて風雅の花ハかゝる類をいふなるらん。「恋せばバ人もんハあてのこ流しものく哀もあれよりぞおこる

年あるゝや海士れかまくれ伊勢参り

これ類ハ味あり

是これ草葉めしに插ん年の暮
此是これ流るゝ年れ涙なるらむ
これらに年忘の句なり。打碎きたる体裁な
がら。句意の勇明なるハ格の正しきより。後の
句法ハ忘の字を喩しより
佛の舌に骨なし皃なるひ
佛舌無骨の方便なるハ国より翁が知る所也。
今の世除秋の門在ける木葉驗者のうちの
更なる呪文を唱へり。むそうれ上蘢の賣僧残

此道さるまじくなりん。さしく翁ゟ世明暦より元
禄のあいだ九四十年余。その志くべき画一なしぬ。
集中混しあるしてお後もまさしく知る事
難し。今ここに此句を挙て只その志ろ庵乃
帰する所なるのこ。
あら何ともなきのふハ過て鰒と汁
針立や肩に掛打度なりも
炭くかく掛子や勢あれ去黒千
時雨をやもゝかしかうて松の宿

しくれ行や舟に杭つなくに付て
寓居れんを志て正年ほまれ
鶏の声まよしくるゝ半夜なり
今屏の松の古さや冬ありけり
かふ斗人も年よれ初しくれ

○境界の部

松ほとの一風を好くところ老ハもとより境界をよく。隠者家のまハ隣りしねど。飾が動静その情と。なれど。俳は数多く只境界といふものとされど。條下の句は境界をたよく定まらへきなり
夜句もあり老母称桃青庵の来
蓮葉に吟たる伊勢の初たより
月は一ツ瓢ハかろき我身かな
初句夜ありとて庵中一物も有まし葉波たる母称

桃青ハみづから隠者なる事を家業とし。世人の迷ふに驚しむるなり。中の句ハそれをとくろハ蓮葉ハいふも更なし松竹ハ葉をを残し。難題に黙を加へん。境界にもあらねども迷夢の志としせんハあるべからず仰く神仏ハせのたよりなきとなり境なる抱一ツハよるべなし其の聲句なりて世藝なく身のうるを示しくるなりこれらの句境界を観せしめたる句忘るべからずと知べし。

似合しや新年迎瓢米五升

かくさぬぞ宿ハ菜汁に唐がらし

初句似あはしやなり。されど境界の句七十斗なり。集中身ひ哉ハ我といへる句ハ大抵境界の句と知べし。

嵐雪が贈りける正月小袖をきて

誰やらが姿に似たりけさの春

此句たれの字こそ人なるべし。其ハ境界に似合なきを省みてみづから嘲りいへるなり。

道元禅師。越前の永平寺に住給へり。
後深草院より紫衣禅師のゆるしを辞せ
る事能ハざれバ生涯架上に空ふせしと也。其
偈に。永平雖山浅。勅命重重々。却被笑猿鶴。
紫衣一老翁。この偈のこゝろハよく紫衣をおそるゝ和
尚なりと。此山の鶴や猿が嘲り笑んとなり。
今の句畧解なり。

起よ〳〵我友にせんぬる小蝶

これ荘周の胡蝶のこゝろをしのびまさしく心を探る人
なを憐なるなり

ひとつ脱てうしろに負ぬ更衣

古郷をあはせ物見んの松にまかりしや

夏衣いかなる風をとりおこさせ

二句ながら旅中の更衣也。初句ハ一僕もなき事を
喩せり。次の句ハ中仙道熊坂長範が名跡の松
なりしが句意ハ読によって其盗ぞせし松ならバ。
我寝衣の人目にまぎらしきを松にかけたる也。
松の恩ハん事もやさしきのあはれなるべし

志ることの句ハ世俗のそなれたるきを歎しける
べし。晋の阮咸が犢鼻褌(ふどし)をさらして未免俗
といひし状なるらん。

人は米を喰ふなく

よの中ハ稲かる比や草の庵

閑窓銘

此句の作や芭蕉ハ穏なる比門の極
本情を殊に程能たく佳ぬるなる
初め稲かる比の句。世界を万里の外ニ捨たる
情緒を示せり。此句の句端に出て文かゆる緒
まさず境界まさに明なり。

此句ハ身に家ハ染んし食ふ男なる
此良やこられも又家友なりし比
此二句端出けり。初ハ其角が豪游を戒める
なり。彼ハ游ふ楽し。此良ハ杜紀を示せ。此賠
芭蕉ニ其角並の戸ニ家なる蓼食ふ蛍なり」一
と称しとぞ。後の句これもその比のなりなく。
常になづまぬ動静をひとり吟したるなるらん。

曽良が来訪ふ日

君火をたけよき物見せん雪丸け

一井亭

旅寝よし宿ハ師走の夕月夜

初句ハ雪をよきものと称したるが境界なり。後の句ハ東西に人帰る師走の日に。ひとり月を翫ふハ。旅寝のなき身これ旅寝のなりと。境界を甘んじたるなり

笠もなき我をしぐるゝ何とゝ

いかさき声や霰乃枯木笠

こゝそかくもなくてや霰れ枯尾也

初句利をぬ天道とは知ざれども。粗しく姫むるの俳諧く。笠もなきハ境界之。次ハ枯木笠を風流物とし。こゝ身杜甫李白が才にゆらくびしく。風流を責ゆりく法師とも世の識りを省ふるく後の句たし書に二秋を経て居に帰るとなり。こゝもかくもの辞る雲水(うんすい)境界を示し。霰れ枯尾花ハ諸生の甲斐なきを喩せり。

深川八貧

米買に雪の袋やなげ頭巾

これ貧しくの句なり。俤一ツのこらぬ境界を喩せり。

年の市線香買ひに出ばやな

是此市ハ迎春をいとなむ世の賑ひなれバ仏一ツにつかふる身の茶湯を放下するを喩せるなり。

月花も情なりしに年の暮

盗人に逢ふて夜もあり年の暮

此句の意ハ身に仄かなる風流を捨くれども。其実の山家かこの楼閣賓客と禮き杯ハ。古としも果しくるとなり。次に天の人を生育するや。ほかるうちハ必食をせ。肩かるうちハかなしび慈するものゝ身や。州唐の貧しきをさく人にかゝはれる我もかれど。又かゝらぬ身を死よとなり。此二句境界歓喜の身一なり

○端書の部

二句閉口題四句

大津絵の筆のはじめハ何仏

あれ　皇國の故実を示ス。閉口ハ仏の名を閉口

なり。故く物いはぬ事なくハなし。されバ

お端書なくして句意の立さる事。境界乃

いはれなるべし。

曲水亭

小路の数の子くさき年始かな

これ曲水が細子あるさきに隠居ありて銭数の子

背比いやしきわたく物しける砕器をりてもそ

うふわざありける句なり

風麦亭

素堂ときく九日の豊山への物

この句説云と成こゝあるハ全くあしとの風麦

亭を述る句なり句意ハ陽春をまさる物ま

くまでご正月も上旬のうちなる年豊山乃麦

ハさや素風年物むく丈とハなりゆくといふべく

謡曲をきかせさるなり

清水流るゝ柳ハ芦野の里に
ありて田の畔に残る此所の郡
守戸部某の此柳見せはや
など折〻にの給ひ聞え給ふを
いつくの程にやと思ひしを今日
此柳の陰に立より侍りつれ
田一枚うゑてたちさる柳かな
青柳の泥にしたるゝ汐干かな

道のへ柳の事ハ西行上人の山家集に出たるに。かゝる
地方なる歴〻もゆかしび。こハ翁もよく知べき哉。
この謡書なるハいぶかし。そハともかくも歴〻
ありし跡なるも。一句の意を先ッ立並くを見ると
は。一句の表ハ柳の風に吹迷。田の上へ靡
かるさまを。書くとしては田を植る如くみへし
が。又吹返されて引のくを。早乙女の田一枚植て立
去るさまにたとへたるなり。次ハ汐干
の句なり。柳のちなみに出したるのみ。

秋風の鳴滝の庵を訪ね

梅白しきのふや鶴を盗まれし

これ仙名りくのすしを林和靖に擬し。庵

清雅なるを諭せるなり。白梅は実なき花なり。鶴は

ゆうけ出し。その実なき花は又隠しもて盗

まれしとも。これ滑稽の利口なり。

朝をきゝ許す事を誡して

これ人の荒蕪くおもはん花の表

これ自己の句なるべし。此句は斤是山にて雪逢

皇子達磨と出合の事をよめる句といふ説あれど端

書さへなく唯忠に加の字を満吉みよみ桃青既陀

の句を通退しかるみやひたる中に荒蕪くあらす

我升といひし自己の句と見えし。が依て近世時人俳

といふ書にいふる人とも志らず伏見の桃山にて会合

の如くわらむしろなくかゝひさる中にしみて稲荷

羽会氏のもとにて書を借りて見るなり。此句は

客をいたはり句体のりて捷ひとさらじやうちの歌士羽会

氏に来て其人の恩ふることいひて生涯の恩を謝し

あるとぞされバ花ハ世に出逢ありけれハかゝる愚人を
て喩したる句なるも志らん

草庵に麻あきらく渚さらしきて
濱のうへに出らく

あけぼのや白魚しろき事一寸

これ曙の句に冬ハわづかに白く成るを海辺なれバ
白魚の一寸斗なるにて喩たり境界の新春此句に
同しや新年。瓢米が弁に同し一雑裁之

閏正月朔日

なぞやちの正月さゝや若菜の下

壬正若菜の句なり。なぞやちハ源氏の冊子を
くり返しくり返しくりかへしゝる正月なるを喩也。
これ若菜の巻の上下二冊にわかちたるにかけひ
よせたり

遁世のとし

雲と隔つ友かや雁の生別

是ハおもしろき句の体なれども格を失なく
ねるも彩のやくなるを見とれ欲をとるもの

も又移りゆくに本說紙たのもぬを第とする
なり。

路通か陸奥へ行を

草枕まことの花見しても来よ

是のまことゝいふハかの道好の情なさけ川せとを示
せらるなるへし。

水口にて廿年を経て友に
逢ふ

いのちふたつ中に生たる桜かな

此こゝろハむかし親しきか為に咲、親しハ友の為
に生たる世ぞとなり

後代のみさうといひしハ宗祇
のむかしに匂ひて

後れ実をならひにせん花の跡

右の句連と俳との分別を論しかたきかことく
四境界を合せさり季節ハ其あるへし

桑門已百亭に日ありて

宿りせん藜の杖になる日まで

麻の角まげ一ふしの別れかな

和足亭

杜若われに発句のおもひあり

かきつばたかたるも旅のひとつかな

初句ハ杖をとゞむる日まづすて。亭名の百乃字を諭せり。麻の角の句。たゞし書を結ぶ人事の別なる所なり。和足亭これ亭名に合なし。三河の国八ツ橋に題をとき結末を乃ミ。途中ねハ洲の色をもくたるくきぬる旅をし

ぞおもふよみ給ひしに。秋たけおもひなし発句これおもひ皆のこととなり。次の句たゞしうき羈中とおもせられも洪沢の時なるべし

甲斐の山中にて

行駒の麦になぐさむやどりかな

此句表ハ山路のうき旅。一夜しれ定まれり題おもしを。行駒の道色の麦を一口諸念り行もて喩せり。題むがかくの色なるを省くる格なり

落柿庵にて

さみだれや色紙へぎたる壁の跡

此句表ハ庵の色紙のおのづからへげゆく。永きさみだれの湿気を論じ。裏のこゝろハ。此庵小倉山のほとりに侍れバ。かの定家卿の百首の色紙を思ハせむ。しかし時雨の亭。今ハさみだれの落柿舎と變じけるなり。

とさなきその紙失ひし人は

心ゆき人はたくさん花も安楽に

此発ハ芭子なる事を示せる也も一体裁なり

風瀑亭を餞別に

忘れずバさよの中山にて涼め

是ハ離の旅人の餞にかゝれて

又餞むさよの中山あり松島

初句ハ西上人の家集忘れずバと申ハ此度の旅ハ我を忘れど。今あらバ又餞して来るよなり。次の句さよの中山ハ又餞人のうけたる句の

こゝろハ命なりけり又かゝる物紙貴賤もあるよ
と存せ。
寺に寐て誠がほなる月見かな
月見する座にうつくしき顔もなし
世は白く梅も一枝みそかね
形代の小宿這入やみそさゞね
初句ハ相応なる次ハ古き歎月を端にかける句にもよく聞
ゆへふかふして味ひありて才之端也一枝形を裁入の格之逃まじ
のみそさゞねハ嘗て様しするぎしの句之論ハ新しと知りて形代の句之

髑髏の絵の賛二句
稲妻や顔のところが薄の穂
いなづまや髑髏の額もしぐれ
角力の賛
裸身で押合ふものや月と風
絵の賛ハ不数を知りて喩をこれ常なり。此
三句体を知りしといふべし
嵐雪か画讃
恥をもて下手の加くさゝれなく

菊好の賛

秋の野をうしろになせる法しかな

画賛

一霧もおもはぬ萩のうつりかな

賛ハ其賞するがゆへに。極むる物なり。たす
くるものなり。狂良の句鈔相に句の表をあらは
さてさへく上手を賞しより。次の菊好ハうの
法しが蘇に而ハ暦する月ハ隠なきをのがる物
うつくゆるによりて。其人を極めるなり。萩の
句ハ画なる由意に任さぬところに辞ありたる行
ところなり

虫とりに鳴けり

蟋何と聲何とかく秋の風

虫ハ抜れたる種あまた影を探して鳴せざるハ。
故を事とする俳諧の一風なれバ。蟋とも虫
ともいはゆる八作者の一家特といふべし。譯
人の虎を大虫と書しも我党れ万葉戯書は
好るに。されバ風流のかゝるたぐひもゆるし

何ぞ撰だん

車庸亭

秋の秋を新しうる剰かな

車庸の熟字未詳。おもふに庸ハ常なりとて
すなはち中庸なれバ。その両端を叩きて中をとり
ちふとある聖語よりとつきことを賞しけるなれ。

東明舎さん東明ハ楼氏かく更
科の月の句を前書として爰に
妙典の巻に隠る月かかりし附

絃を産としてて
入月の絃あて机の回陽への那
入月をのらく机の回陽を回天なるけむなりしき
かうつきことを示せり

武蔵守泰時仁恵を先とし
政以去欲

名月の出るや五十一ヶ條
おもしろや名月の秋や茶臼山
初ハ五十ヶ条の句。後の句ハ茶臼山の句なり

秋の日の色こそ見えね松の雪

旅行

あかあかと日はつれなくも秋の風

さら侘びに秋や聞ゆるの下鐘

まつ雪や雪小僧の袋の色

翁ハ翁だちうき世の秋とよみて

初ハ秋季の句なり。こゝろハ松ハつれなく色なつかし。秋風の淋しきにハわれぬとなり。旅行初句の心ハ日の色ハあかしよくなつかしの心。猿

句く別ハ意や秋風を知りとなり。淋遠してふ鐘を夜の聞ゆるも色こそ見ね松のおとゝくまじくしとして聴かぬをふさ心の句お照く聞し。聞ゆるの句れなる淋鐘聞て淋もわざとでらに老が旅路ハ無常をおもふの淋をとあり。翁の句の雪小僧ハ今の世に珠数売のろく淋しなりこれむかしハ世の祈者すて人の菩提をとへて歩くとめぐり。珠数商ふハ只こゝ資なりしとぞ。翁が時代なをは然それんが句の

玄ハ妙言の消安きをかんてもとのひとかくる
を色即是空と觀じたるべし。ともあれ乃
ちハ。小法と遊びの曽小乞食の旅笠てうきく
旅する事をかんじ入れ吟なりとぞ。ふハかのうき戯
世く帰る暁の夢」とよめる歌のおもひよせなる
べし。されバ旅を抱て経歴する心ハ。ゆかりれ
をかんとふし哉。

千里の旅立路糧を佳くせず
野ざらしを心に風のしむ身かな

野ざらしハ旅の死骨をいへる歟。これハ翁が性得
の好むところ。

芭 柏亭
秋ふかき隣ハ何をする人ぞ

これ秋色のうちや寒すべきなく。家に杖をとゞ
めて籠りゐるを。ふりて栖(すまひ)する隣人へかけて。
よく問よる句也

桑名の本当寺にて
冬牡丹千鳥よ浦のほととぎす

霜の後撫子咲る火桶かな

これハおきなの句にして霜天の蒼庭を謝したる
なるらん。郭公ハおきなのうけなり。火桶の白きに
世俗思ふと描出けり。これいふなる夜の志るしぞ。
折りふし火桶ハ翁の撫物なれバ火の歌なる紙
もとより出でたる絵空なるらん。されバ翁もんも
のと天然なりしぞ。のうきく翁がさんとおぼ
火をおりふる火鉢の美君とぞ。さるうこなん。

尾張寄川より宮しげ咲山織

汁料理何にか

三十里尾張大根の噺かな

気しげハ地名。寄川八氏なるべし。此句しは書の
さうちようくかのし所あるも手紙なとれ端
に並べて白志るし置バ此句多し。此三十里ハ
東海道尾張にかかる所凡三十里なれバ、翁
来のときに名産の沢山なるを広めきぶりかや
かうしし時の吟なるらん。大根ハ沢山なるを序
とし、殊に三十里とおけ里。

此上ヤ書簡しをり土大根

此句も書簡をとりて臺所のことを喩せる
なり

大聖持の全昌寺にやどる

庭掃て出るや寺に散柳

佛言拂地有二五勝利一ことの意によれるなるべし

旅人とならんで

るとさくなでむる雪の飯かな

發句に旅人もあるべしかゝる雪

初句雪途のかちゆきに堪ぬ旅人のありさま
たすけられたるをかなしく其ありさまをとくゆかれむ
となり。実ハ人をゆきれむを例の手もち縁まうく
ぜさるく詠の句もかならずこの句ハ深川の草庵
などにて作せるなるらん。

師走の海見んと舩さし出して

海暮て鴨の聲ほのかに白し

これ冬の海の句なり。海暮て何のかにかし
鴨の聲といふハ鴨の句なりとあるべし。一体截く

志づしまつや　おとろきも十年

摘きんや茶を風の林しも志しぞ

これらの躰集中に多し。さて是躰に作りたる
のこなり。句は摘の程に寄く、ゆるハ先なきもの
必りる志ずべきなり。此初句「待ねどやおだ
し十年おとろきぬ」とし、茶のもの句へあなど摘
茶を風の今ぞ林」と作らバ、更に風流なし。ゆゑ
手求めくかく作りたる林の字ハ麦林哉を
存ぜし秋なるの秋なり。

掻やもろき蛛の世捨酒

これ蛛のを世をすて人と刺するより出たり。
その殺する湯のたぐひなるを、ふるき捨なう
つしるたるべし。されバよりて湯でふ事
のとめべき所とも見えたり。掻事ありしむる捨
あるべし。

森見えハ松風林星宵月を萩

ゆくかしるハ宵の名る日

星膝の闇はんしや鳴子なる

此端書なくて客の体なる句。其情ハ閑の趣
とみるべきをすぐに発句へ作りけるゆへ。是迄
なし。書の一体なり。句意ハ千鳥紙閑寂の尾
とせしく。端書の本意ハ松島か景ふるごとく寂
景ハ叔むかかりしとゆる。猶すべく桃青さの句筆
意初しを。今此俳士その名をおもひ定めざるも
時の人か。

○名所の部

吉野山

花さかり山ハ日ごろの朝ぼらけ
此日ごろの字俳諧の極ひとつ一生の秘なり。
雅言よりふ迄日の花に似らずいひ。ここハ吉野ハ常
不断吟咏なる名山といはんや今花の盛
なれバとあり。古今の人をつゝのひかりても営むべく
ことなるぞ。さしむべし。章中吉野の字なきハ

花王堂

まだ咲かぬものありや花王堂
此本尊両来歴師なるゆへを喩へるなり

大日枝やしを川捨し一露
られ此ハ中空海師の墨跡たるむれ書乃
しゆるふれるなるべし。されバ一露ハかゝる
是どもこれ物に。撒若にらるべし

表ハ鳥の當利くらハ此浦人
のことなりや

當利うち硯状述和歌の浦
貝寄せる風の手にや和歌の浦
行表に和歌の浦まて返付くるを

初句の五文字當利かしぞの心とぞいとさだし。
第二ハ貝合の折りひよせまでく。いづれもこゝろゆかし。
第三ハ騒表の上なきこゝろ色をつりく。和歌乃浦
の絶景なるを諭せる句也。句の表ハ表は別れ
を惜しみ慕ふ。漸く和歌の浦まで返附くるり
と雅しさく。裏の心ハ表は別に風情を失ひされ
ど。今此浦まで来りてあれだそしき好る心表つゝも
換く面白しと和歌の浦を賞しける句なり。
此例まで後の人ハ第二の句に一両なしにをふて二月

七日八日なれ」此句も不二を賞しける句之表ハ
二月の七日八日古実なる故ふじハ涌て拾ひし
ところ也裏のこゝろハ二月中旬いと永き日を七
八日かゝりて漸く不二の梺を廻りける也
なりふじ山ハ大飛が序なれど雖く人裏の義
の七日八日まんを涌かし椒も大山なると合点
まるべしこれらの類がすなハち俳諧の名義にて
俳士の術ハこれを極しくこれらの句かの幻術
のごく賞すともさも有なん蕉翁一ツの名藏

織女ハ逢ふに添むるも此吟ハ逢んがための
辛苦なりきん又翁がふじの句も義ごくこの
作りこゝろんを今集に見ゆる和僅に七八句なれど
に只一句にかゝるべし学者其篠ヶ年たびん
て勝べし

いせまで

神垣や思ひもかけず涅槃像

句意ハ明なり神垣いつくハあれど倭姫世紀に
佛法の息を屏くとゆるなり此大慶寺の吟

と定めぐるなるべし

美濃の古猿橋

猿橋や蛛も居垂る笠のよ

此句蛛も猿にならべ合せ居垂るにて橋乃
危きを諭しけり。

春風や一本うつる三笠山

かゝる名義の地に句を寄なと頼むる事は
よくせずは死句となるもの多し

羽黒山中にて

ありかたや雪を薫らす南谷

羽黒根にて

夏れ月むかふに物なし級縄山

涼しさやほの三か月の羽黒山

雲の峯幾つ崩れて月の山

初句は南谷の句にて季節は夏なり。風雅薫
らすとすべき所を雪と作りたるは一体裁にて。中
の句こゝの山の季節未辞。諸邦より参るも
宇賀衛門臺保食の神なりさもあらん。句はこなた

ち世にいふ餓獣死して霊となるによれるなるべし。蔓の月ハ月次の月をよしく痛ましげの夢さめて思ひするなりけん。芽之ハ女の態にて山の名ハひとつさがり。後の句ハ雲に切迷ふに山の名をのこしけるなり。

白川にて

早苗にも我色黒き日数かな

これ早苗の葉と出るに我旅の日数を歎し。劔(けん)ハ杜撰をふくむ白川の関によめる能因法師

べるなり

麦刈て稲にかへせよ最上川

さみだれを集めてはやし最上川

涼しさや行さき〳〵のもがみ川

初句ハ只麦秋をふくみたれど見せよといへるに麦林のおぶ入によめる句なりん。後二句ハ陸奥一国を只一筋に廻る大河なり僕さしとせり

けふの旅甲斐の露をや田子の浦

浦とハ述べて川の外をさす也。浦ハふじ川の

おもしろく景満なるを喩しなり

さみだれの雲吹落せ大江川

ふ士もかくしさ月の大江川

初句端出に滞なくして嶋田の宿に逗留と

ありし句意いかにしても吹落せといふのがれ。大

河なるを喩せり。次も荒ぶかる波つゞきハうねりもえ

ねにさ月の今ハ見けるて誠しらるゝにつて。大河なる

を能喩せり。

さよの中山まで

いのちなりわづかに笠の下涼

本歌の雅言を翻して俳諧に活すれバ古人の心

の徹なり然ハいのちハ耳心のこゝろなり

越の中山

中山や越路も月ハ又命

これ越路再行の吟なるべし然ハいのちハ雅言

なり

雪白しいさゝ白之保の冬あれや

然之保ハ松の花を指さん句之意洲を補りて出

ミハ松の緑海水ニ泥しくて見え返して様也。今是を
見ん時ハ秀句ニかけたり。松の字をおとしたるハ
例の俳諧也。

武蔵野や一寸ほどの鹿の声

鹿ハ毛物中の大声なるをもて句意明也

箱根の関越て

目にかゝる時や殊更五月不二

此句のこゝろ。さみだれの雲間ニふじの晴るゝハ。
あの清見がたよりハ都ニて見なれぬやさしき
なり不二の山ハをのづから名誉無双の立意をよむ
を也ある

関越る日ハ雨ふりて山みな
雲に隠れたり

霧時雨不二を見ぬ日ぞ面白き

しぐれに見えて隠遊せずんバ心面白しなるに。一景ハ
なるを不ハ都にて在中の物思ひを不尽しく。世乃
中ニ絶てさくらのなかりせバ」のこゝろなり。

崑崙ハ遠く蓬莱方丈ハ神仙

の地なり。眼のかゝり士峯なき地
を撰て蒼天をさへ日月の為に
雲ゐをむかへしむ事文みや
表すしく家千変を。詩
人も句を織さぞ。文士文人も云
紫をかり。画工も筆を捨てさる。
藐姑射の山乃神人あそびさせ
をも乃せむか。其の絵をよくせんか。
雲霧に志かしく百景を表わり

志かしくもたてに清えかゝこに横り志かしく
宛になり。百家ハ大山なるものを喩せり。聲ハま
ごれ二を見ざれとも。此句に勝て云ひ出せだす
色かゝり。只をしひらくハ端まへ寄るく。句ハ始まる
うしなり

不二乃すがたを茶田の霞ひに
これも名ハ好なり。雲来考物しくハ他者の名
気雅不の霞なれど他の名家も及べきなり。
人名を雲一字なれどむかしハ多かりき。

月清く秋も入日の跡の不二

此不二の辞ハ言分るにて作るこれ常なり。契沖ハふじのねにあふぎつらねたる忍草ハ不二の字の根の字に有なると也なり。当句のこゝろハ月清く日入りて後ハ天地間に物色只清く切ッたる秋天の不二のことなり。其角が月の句に「不二に入日を雲綿やなふの月」不二の字に株にかくれ家哉也これらの句也。株ハ三も標海岸にありて又名物。

俳諧道を知る人百人ハ百人ながら不二を作りて見る。されハ句のこゝろハ或ハ黒髪まさぐれ或ハ様の秋まれぬ迄。或十余に隠見して。其づゝもなく白銀鷲のごとなり

雪も雨の空に芙蓉

芙蓉ハ蓮なり。不二山の異名なり。句意ハ雪も漸く山の中腹なる。峯ハ大空に顕けむ。雪間の山紅葉ひあらはるゝを除せり。

近頃いふ此句芙蓉は 依る中の句空をとかり 郷ハ芙蓉花の句之

一 尾峯ハ雨の雲や不二の宮

此句意ハ高峯より幾千條の尾を曳きたる
山なれど。一方ハ時雨に侵し。一方ハ雪なり。
一山面ニ此両物かゝるをかしく大形に染せりの
阿房宮ハ大厩なるを染さんとて。一宮之間而
気候不齊と作れるにおなじ。

松島や千々に碎て夏の海

まつしまや萩を衣裳ハ月と秋

松島や秋は衣裳に夜の月

まつ嶋や雪れ多紀のきぬくだり

九世の数寄人佳境ニ至りて枕するや。十日廿日
或ハ三月五月。佳句を出して退きし時をかへて又
来て佳句をあへて止む。又物くるひ来しさるハ。
島を貼して筌を捨るのいたれと。翁ニ松嶋の句
なしといふ説ハいかゞぞや。稀りの絶妙をかな
らハ錯康拘なりけん。さて翁か東行ハ此地まで
とあんや。

松島や笑ふかことく象潟ハ
根すかしさびしきにかなしミ

を加へて地勢魂をなやまさん
は似たり

象潟の雨や西施か楝の花

この句象潟と西施を第一し。雨と眠を對せり。
一本に象潟や雨に「と出せるあり。西施は眠をも
させぬるは象潟は雨ある方なり。然るに
西も眠も西施のうへにかゝらせて象潟にて
晴も一方となりて喩への義なし。且奥の
細道の文も此时祝は雨あり。東坡への西

湖の詩をうつせる句とみえんも。西湖雨亦奇し
西施淡濃粧とかくこと也。されどもかく見ば
書れ頭字は只西施をかりて象潟を喩へし
ところ殊なん為のみ。

いざよひもまだ更科の郡かな

此の句は八月の名かけ一とせ。芭蕉更に百里の
道をたどり中秋の天を戴きてなのりし。望月の
詩とする句なれと。此句弥もの字に合せてる
なりん更科は不」在の義なくかつとも秀逸へ。

蕎麦は碓井をこゆる

行かまて麦も見えしぬ木芽かな

これ麦そ山なるを喩せる也

吹花も石ハ浅間の麓の秋

淺間の麓は碓井白根見えぬ集にも出つ信濃の句也秋もみゆれ也見ゆれは鞍の方え

これ浅間のやけ山なるを喩せるゝ。棒の石ハ

碓井なるも軽井しく小児もしらぬ句ことハ

風の浅間焼を山の石まうけたり。

秋風や薮も畠も不破関

能むかしや月見ぬ旅の明ぼのあれ

あくや八景きこえぬ比の月

あくし

石山の石より白し秋の風

初句不破の関ハ古跡を宗とすゝめて。次能

むかしハ越前の浅生津まゝの吟にて。牧牧

あるべし。句意ていつまでも明なり。芳之

此句ハ清なり。其その句加賀の那谷なる。

三井寺は秋風楽しうしろを貴気の吟く。

さゝられは隠せぬもの也淡田の稲

名月のゆふべも瀬田の橋

初句指子のやの字上におさまれやとすれば六月首の句也。今や字を据く味ひけさゞ達の涼しさるを湖く橋の完文なるを論せるなり。次も名所の句ならく。季良夜の句也。瀬田継橋なれど声うるぶん句中指子の置所なく得そし。

六月やミねに雲おく嵐山

功成名遂而退

山の名をゆかしく花をこそ桜なれ

初句六月なれどもそれ掛まじく嵐を添ゆるく。次の句ころハ端出て有て山をかけ山なり

八瀬にて

竈風呂や梅も桜も思ハ草

これ秋の句なり。やせハ薪の産地なり

清滝の浪に塵なき夏の月

清滝や浪に散こむ青松葉

初白波の月を読ふハ光のみなれば塩の句と
基づきたり。塩の句と紅葉の樹の赤ぜしく。
落るハすぐ〳〵寂く。今青葉の新を添へせ。
夏らしく青葉をきらせたる一体裁之

枯立ッや伊勢の山は松斗

伊勢ハ生勢く。枯るまゝ生るをきらせたる
まゝく。これもおなじおもむき体裁なり

八朔や天の橋立たゞねれし

この比京東方より松京山合の中ハ切と夜の

文珠堂あり。定むる所ゝ名んどたゞみれしの
如し。八朔あり時節を呼せし。諭しれ結え
待て當てまべきなり。

葛城まく

あなほえて花ゝ咲申く神の良

これ神ハ一言主なるべし。さて名所に添て
むくかるも。大体其つきの志るべくおなじく。
只其場をあさぐのとの伽佛出華んも句を蒲
孫ぶる益あき八省きぬされハ歌の名所を撰

集は総ておのづからかぎりありけれハ此外ハ志
うしほ

菊の日や世間は秋を堺町

これ東武戯場の地にて有るゆゑや古く。
人の知るもまた廣し。元禄内見不渡なる
ゆの洛の諸家大坂の小濱なるを挙て通常の家
おのひを述るにハほしかれハなどか詠物の数なら
さらんなどしかれかれてを救ひ続しうしほぞ。
出くを知しきにしもゆりなん

十六日の空はれたれば海すゞり
の小貝拾はんとて種の濱に
舟を走らせ海上七里

さびしさや須磨にかちたる濱の秋

これ須磨を淋しき住居に云て諭せるなく

秋や須磨平家や秋しる麦日和

月はあれど留主のやうなり須磨の夏

月見ても物たらはずや須磨の秋

ひさかたのまさきま須磨の板ちかとせ

又後世を願むれハ又道ハ江戸の秋
初句の意ハ時節れ淋しきや秋ハ江戸の如くハ。
兔也かくるの淋しきや。江戸ハ秋のごとくの。今
麦の秋ぶかく淋しかれど。淘との秋の淋し
さ思ひしるとなり。次ハ暮ハ月の涼しさを観ふ
時なりし。私かしとくそれさへを無ゆる人なし
とく。ム句めハ辞志しくやハおとれり。已句めハ引返
の冷まくひゞるさに去地の涼ましきをみせ。
窗りに寒くを寐にかけたり。新く案じて

後。浮に果の句ハかりつるなりし。此句につけてく
一笑談あり。此年一的御人来りて世上の風流
を論じ居るうち。名誉の俳士も時ありて句にも
好もなまなり。奥別の名れ許まで十七字を中
秋の月に接べし。一席の二三人句を吐て懐紙
に載せ。桃華宗匠の句を請けれバ。名月やと
吐く跡をいまだかゝるうちに化りかく七句紙
載てり。桃華又請けれバ宗匠ハ名月やと吐て
又止む。一巡までみかる迄ども宗匠ハまだ御句

なき夜又積みけり。宗近は「名月やと吐たりし夜
合せて「名月やア名月や名月や」となれり。
行御中かゝる事もゆゝきとかゝる。此引御か
の句は宗近のふりて工めるなるを志らざる
ぞかなしき。此句は名月やと歎じてあまく
ここ夜の月たゞふるき物なく。清明なる中は
騒人の袖にみそぼされど。今後人の句もい
と嬉しく悦ぶべきに。後人の嬉しきは世に入乃
益すて知る事なれど。そのなかに文字の手段つ

けぬまでさびしさは十分むるよ存じけり。
体裁は此格りなきもとは格になるべき所也。
されど此格てふ物前の世は人の心に備たる事
つらんなる。それもいはゆる如く。耳に取りて学ぶべき
体なきで夜なりや。いつしか学ぶもゆかしくかの行
御人の如く却て此の格ゆるをいふべし。かの道
を正風なりといふ。これ等を羽識の下落ながら。
人の向ふりて。此羽識もしといふも。さ名残
みたりくぞこく人羽識なるゝのみ千毎せざるが

ごとく。世の識者いふぞら俳諧の心義あることを知らず
んや。且翁が句を雅に願ふも。見ることを求めて方
器を蓋ふがごとくなれど。多くは其本を失ふ
て。徒玄となり。又かのれが作句に願ふも。人の
聞ならぬその毎に惑ふものあらん。されば徒居の
義に願ふて格を立るは学びの為のことなり。後世
と率ひなしんことを願ふが為なり。今格段を
指く作るの句は格にかかわる理に定をば嫌はれど。
別くの段は格隠せし句れ円に存し。是未を

喩へば義立て人の心に安し安く。自句乃
香に願ふも人に依て決するの就なのる
べし。されど格を隠せとは。古人の句に一燃る
火は灰打起て忘れず。火は貪嗔癡之妄の
燔火なり。句ぶらずは忘れの切瀬は燃る火なく
灰をうけし消せかが如し。と郷しは足るとるの
うつなるべきよさは作しだ偏に火に灰をうけさ
て忘れしるるさるに作りうるはすなわち格を
隠しうるなり。初秋の甫覚の句は皆式体裁く。

扨ての説もなほ事に臨みて義ふかく。又七
大の辯ありといひ達くさとき能はざるものあらバ。
故事古語の傳を借りて或ハ寓言を取りて喩を
べきん。將に寓言をいはんとおもふ。荘
子といふ人物化の理を人に曉さんとするにたと
へに解き曉すべき手段なく胡蝶の夢のたと
喩せるとぞ。今その物化の理をたとへんにある靈に
利富といふ者あり。一日所用ありて隣里へ行たる
が。道のかたはらなる丘に老人二人ゐてかたりけるは

汝居たる里。利富立寄りて子細を問へバ。いはく
己れはいたつてかなしき事あり。今齢すでに六十
にあまり人生かぎりある道に極て死去んハ必定
なり。されど別滁ふたたび世界を去りて更に別
滁なきありの世界へゆくを思ひて。ただいたく
かなしとさへ。又さかしくなく。利富がいはく。あな
哀なりふ形と大に異(ちが)ふ。君達ハ今死して別滁
なき世界へゆくとするが。我ハ別滁ふそのことし
ハの世界を去りて今此別滁なき世界へ来り住む

とれのふなり。二人ハいちく捴く君ハ此の世界紙
裏とし。汝世界を裡なりとするか。汝世界を表
するハ此の世界ハ裡なり。於の如く互ならに表
を争ふべくやるべし。利害なさめよりわれふたりとや
かりきん。汝二人ハ別すへしとぞ。さて汎ていちく。越后
出しハ後と共に。今ハ越后の風もいやとうるひ去れ
里二人の老人はくずくられをこさく。忽ち物化乃理
をさとり。後を掛けてゆきけりとぞ。汝汎ハかやと
越中の国ニ国此里此枝君。初風がうらひ初めし

とぞ此初風はじめハ越後の国新潟の浦にありけ
し。金塩の枝君ときゝしが。ゆゑありて二国へうつり
さる。されど別涙の枝君されども別れ後を
み。七日が間昼夜をわかず涙を流しに。初風も
初めりし別れを日もくれんともこらへてあく
年にたちけられて二国へぞうつりける。みな人
うらやみてなしびたく庭さしく。なさけも
まこと娘あふされど。年の寄ども色ずしく。文
此里に別涙の君ありてあとの出来りうされどなる

ものハ目にうとく。近づくものハ目に親しむ。
これ人情の常なれバ。渇しては鍼石の事をも
忘れ果て。かの楓をうらみしとぞ。俳諧形の
妙し。さるみちにて近づく心化りく。深のまゝ
跡をわすれ。ませれかたりたる鳥ふなる紙。物化
といふなり。荘子斉物論を人に暁さんとて。我
夢に小蝶となりて花に遊ぶ。荘周の心蝶のこ
となり。これ即ち荘子なる事ハ更に疑ひなかり
しといへり。これ胡蝶を仮りてかの物化の理を

暁せるハすなはち俳諧なれバ。花も物化を
喩さんとて

かゝる社俳諧にせん花こてふ

俳諧一串抄 終